平12
日
99

昭和十年六月

板船權ニ關スル説明書

東京市役所

立憲政治研究資料室

10. 6. 13

0014760000

0014760-000

AZ－812－3

板船権ニ関スル説明書

東京市役所

1935

ACE

目次

一　緒言

二　板船權ノ內容

(一)　板船權ノ性質

(二)　板船權ノ所有關係

(三)　板船權ノ財產價値

三　東京市ガ交付金ヲ支給スル理由

(一)　板船權ノ所有者ハ日本橋魚市場ガ東京市ノ開設セル新市場ニ移轉セル爲ニ其ノ權利並之ニ伴フ利益ヲ喪失シタルコト

(二)　板船權ノ補償ハ業者移轉收容ノ條件トシテノ當事者間ノ內約(但シ不完全不明確)ニ基クモノナルコト

四　結論

附錄

一　板船權問題ノ沿革

二　艤權及江東靑果市場ニ於ケル特殊權利ノ性質

三　板船增尺表

四　板船權ニ關スル判決例

五　板船權艤權所有者調

六　板船權其他ニ對スル交付金要求額及査定額調

七　魚市場市營ニ關スル請願書

八　板船權艤權ニ關スル請願書

AZ
812
3

國會圖書館
43.3.12
圖書館藏書

753857

一　緒　言

多年ノ懸案タリシ日本橋魚市場ノ移轉ハ、大正十二年九月ノ大震火災ヲ機會トシテ斷行セラレ、同年十二月市場業者ノ全部ハ、新ニ開設セラレタル東京市設築地魚市場ニ收容セラレタルガ、之ニ依リ市場全體ノ業態及業者各個人ノ營業上ノ利害ニハ相當深刻ナル影響ヲ與ヘシコト勿論ナリト雖、之等ハ市場移轉ニ伴フ止ムヲ得ザルノ結果ニシテ、其得失モ一概ニ斷ズベカラズ、從テ開設者タル東京市ニ對スル補償要求等ノ問題モ發生セズ。唯板船權、艀權(平田船權)等ノ如キ一部業者ノ所有セシ特殊ノ權利ニシテ、舊市場ニ於テハ移轉ノ結果自然ニ消滅シ、而モ新市場ニ於テハ其存續ヲ認メラレザルモノニツイテハ、其權利者ノ損失ハ之ヲ新市場ノ開設者タル東京市ニ於テ、相當ノ補償ヲ爲スベキモノナリトノ要望起リ、幾多ノ曲折ヲ經タル後、遂ニ昭和三年三月、市會決議ニ依リ舊日本橋魚市場ニ於テ板船權、艀權ヲ有セシ者及江東青果市場ニ收容セル各青物市場ニ於テ特殊權利ヲ有セシ者ニ對シ、七十萬圓以內ノ交付金ヲ支給スルノ件決定セラレタリ。

然ルニ偶々本問題ニ關シ瀆職ノ不祥事件發生シ、而モ問題ノ根本ニ關シ、當初ヨリ賛否ノ論甚喧カリシヲ以テ、決議ノ執行ハ自然中止ノ狀態トナリ、不祥事件ニ關スル裁判ノ經過ト、中央卸賣市場開設ノ問題トニ關連シテ遂ニ未執行ノ儘今日ニ及ベリ。

而シテ本問題ノ主ナル部分ハ固ヨリ板船權ノ問題ニシテ、艜權及江東青果市場ニ於ケル特殊權利ノ問題ハ附隨的ノモノナリ。依テ以下主トシテ板船權ニツイテ解說セントス。

惟フニ板船權ノ問題ガ一般ニ甚理解困難ナル所以ハ、第一ニ此權利ハ日本橋魚市場ニ於ケル特異ノ權利ニシテ、其性質ガ法律的ニモ常識的ニモ一般ニ明瞭ナラザルコト、第二ハ之ニ關連セル土地家屋ノ所有權又ハ問屋、仲買ノ營業權トノ區別、及是等各種ノ權利ノ所屬關係ガ甚混同サレ易キコト、第三ハ此權利ノ財產價値ノ評定ニ關シ一般通念的標準ナキコトナリ。故ニ板船權問題ノ批判ニツイテハ、先ヅ此ノ三点ニ關シ一應ノ檢討ヲ必要トス。

次ニ東京市ガ板船權者ニ交付金ヲ支給セントスル理由ニツイテハ從來頗ル議論アリテ、或ハ之ヲ法律上ノ義務ノ有無ノ点ヨリ論ジ、或ハ之ガ當否ヲ社會問題ノ觀点ヨリ論ズル者モアレド、之等ハ抽象的根本論トシテハ兎モ角、市場移轉斷行ニ伴フ實際措置トシテノ本問題ノ要点ニ非ラズ。實際問題トシテノ本問題ノ要点ハ、結局第一ニ板船權ハ日本橋魚市場ガ東京市設築地魚市場ニ移轉セルニ因リテ消滅シタルコト、第二ハ板船權ノ補償ハ日本橋魚市場ガ東京市設築地魚市場ニ移轉スルニツイテ、其業者收容ノ一條件タリシコトノ二点ニ在リ。即チ若シ權利喪失ノ事實ナケレバ補償ノ要ナキハ當然ナリ、又若シ權利喪失ノ事實アリトスルモ、移轉ニ際シ何等ノ問題トナラズ、無條件ニテ移轉シタルモノナリセバ、必ズシモ後日ニ至リテ東京市ガ補償スルノ必要ハナカルベシ。之ニ反シ移轉ノ爲ニ權利ガ失ハレ、何等償ハレズ、而シテ之ニ對スル措置ガ移轉ニツイテノ一條件トシテ當事者ノ間ニ何等カノ合意協定アリタリシモノトセバ、東京市ガ其當事者トシテ或ル程度ノ處置ヲ講ズルコトハ止ムヲ得ザルコトナルベシ。故ニ板船權利者ニ對シ東京市ガ交付金ヲ支給スルノ理由ニツイテハ、此ノ二点ヲ明ラカニスルヲ必要トス。以上ノ主意ニ依リ以下項ヲ分チテ略說セントス。

二　板船權ノ內容

(一)　板船權ノ性質

板船トハ舊日本橋魚市場ニ於テ、販賣魚介類ヲ並列スルニ使用セシ幅一尺長サ五、六尺ノ平板ニシテ、之ヲ店頭軒下ヨリ下水先公道ニ差出シ設置セシモノナリ。日本橋魚市場ニ於テハ、此板船ガ即チ魚介類ノ賣場所ナリ。問屋及仲買人ガ營業ヲ爲スニハ此板船ヲ使用セザル可ラズ。之ヲ使用スル權利ヲ板船權ト稱セリ。

註　日本橋魚市場組合規約
第六十八條　頭取ノ認可アルニ非ラザレバ當市場內ニ於テ賣場所ヲ新設スルコトヲ得ズ
第六十九條　賣場所ヲ使用スル權利ハ慣例ニ依リ之ヲ板船權ト稱ス

而シテ板船ハ公道上ニ置カル、ガ故ニ、板船ヲ使用スルノ權利トハ、結局魚類賣場所トシテノ板船設置ノ爲ニ公道ヲ使用スルノ權利ナリ。

此權利ハ魚市場ノ古來ノ慣習ニ因リ發生シタルモノニシテ、享保年間以後ニ於テハ町奉行

ノ許可ヲ得タルモノナリト稱セラレ、大正初年ニハ七千二百三十六尺餘存在セシガ、其後逐年魚類取引高ノ增加ニ伴ヒ、組合總會ノ決議ト警視廳ノ認可トニ依リ漸次增加セラレ、(附錄三號參照)日本橋魚市場ニ於テハ板船權ガ最モ重要ナル權利トシテ問屋、仲買ノ營業權ト共ニ、或ハ寧ロ夫以上ニ之ヲ尊重シ、之ヲ所有スル板船權者ノ主ナル者ハ、市場ノ支配階級トシテ絕大ナル勢威ヲ振ヒタルモノナリ。

(二) 板船權ノ所有關係

板船權ハ板船設置ノ爲ニスル一種ノ公道使用權ニシテ、市場區域內ニ於ケル土地家屋ノ所有權ニ附屬スルモノニモ非ラズ、又市場ニ於ケル問屋、仲買ノ營業權トモ別個ノモノナリ。

本來此種ノ權利ハ寧ロ市場內ノ土地家屋ニ附隨シ、又ハ問屋、仲買ノ營業權ニ附隨シテ存在スベキ性質ノモノナランモ、日本橋魚市場ニ於テハ其ノ特殊ノ沿革上、土地家屋ノ所有權又ハ問屋、仲買ノ營業權トハ別個ニ市場ニ於ケル賣場所ノ權利トシテ認メラレ、從テ板船權者ハ他人所有ノ土地家屋ノ前面ニ其權利ヲ保有シ、其土地家屋ノ所有者トハ無關係ニ板船權ヲ他人ニ賣買讓渡シ又ハ賃貸スルコトヲ得、之レガ爲メ土地家屋ノ所有者ト板船權者トノ間ニ往々係爭ヲ生ジタルコトアリ。(附錄四號參照)又問屋、仲買ノ營業權者ニシテ自己ノ營業ニ必要ナル以上ノ板船權ヲ所有スル者ハ、之ヲ他ノ營業者ニ讓渡又ハ賃貸シテ收益ヲ得タルモノナリ。而シテ大正十二年震災直前ニ在リテハ、問屋、仲買人九百七十六名中板船權ヲ所有スル者ハ二百一名ニシテ、七百七十余名ノ營業者ハ板船權ヲ賃借シテ其營業ヲ爲シタルモノナリ。板船權ハ尺數ヲ以テ計算セラレ、組合台帳面ニ依ル板船權ノ總尺數ハ、九千百余尺ニ達シ、其ノ所有者中、多キハ一人ニテ三百八尺ヲ有スル者アリ。而シテ一人ノ營業ニハ板船三尺以上ヲ以テ足リシガ故ニ、數十尺、數百尺ヲ有スル者ノ如キハ、其ノ大部分ヲ他人ニ賃貸シ自己ノ營業以外ニ此板船權ニヨリテ多額ノ收益ヲ得タルモノナリ。(附錄五號參照)

(三) 板船權ノ財產價値

板船權ハ法律上ヨリ言ヘバ單ナル公道使用ノ權利ニ過ギズ、而モ慣習ニ因ル特殊ノ權利ニ過ギザルモ、魚市場ニ於ケル賣場所ノ權利トシテ營業上必須ノ權利トセラレタルヲ以テ、高價ナル價値ヲ以テ、賣買賃借及担保ノ目的ニ供セラレ、魚市場特殊ノ財產權トナレリ。其ノ價値ハ固ヨリ位置、其ノ他ノ關係ニヨリ一定ナラズ。本市ニ對シ補償ヲ要求セシ當時組合ヨリ提出セル評價ニヨレバ、一等ヨリ七等迄(等內ノ級別ヲ合セ十一級)ノ差等アリ。賃貸價格ハ一尺一ケ月ニツキ最低二圓四十錢ヨリ十四圓八十六錢ニ及ビ、賣買價格ハ一尺ニツキ最低二百五十圓ヨリ最高一千三百圓、總尺數ノ財產價値七百九萬七千六百八十三圓ト計算セリ。(附錄六號參照)

三　東京市ガ交付金ヲ支給スル理由

(一)　板船權ノ所有者ハ日本橋魚市場ガ東京市ノ開設セル新市場ニ移轉セル爲ニ其ノ權利並之ニ伴フ利益ヲ喪失シタルコト。

板船權ハ日本橋魚市場ニ於ケル一種獨特ノ賣場所權利ナリ。東京市ノ開設セル新市場ニ於テハ此ノ權利ノ存續ハ認メラレズ、賣場所、即チ店舗ハ全然東京市ノ所有管理スル所ニシテ、舊市場ノ營業者ハ板船權ヲ所有セシ者モ、所有セザリシ者モ、平等一律ニ間口三尺(後ニ一間)ノ一賣場所ヲ與ヘラレ、從テ各自ノ營業ニツイテハ皆一樣ニ何等失フ所ナキモ、板船權ノ所有ニ依ル板船權者ノ特殊利益ハ全然其ノ所有者ノ手ヲ離レ、舊市場ニ於テハ自然消滅ニ歸シ新市場ニ於テハ何等之ガ代償ヲ與ヘラレズ、故ニ市場移轉ニヨリ全營業者ノ營業權ニ何等ノ變動ナク、又ハ却テ新市場ニ於テ營業權ノ價値ヲ增大セルコトアリトスルモ、板船權所有者ノ損失ハ之ニヨリテ補償セラレタルモノニ非ラズ。

(二)　板船權ノ補償ハ業者移轉收容ノ條件トシテノ當事者間ノ內約(但シ不完全、不明瞭)ニ基クモノナルコト。

日本橋魚市場ノ移轉(從テ其市場ノ閉鎖)ハ警視廳ノ命令ニ依リ斷行セラレタルモノナレドモ、東京市ガ新タニ免許ヲ得タル築地魚市場ニ舊日本橋魚市場ノ業者ヲ收容シ、其業務ヲ開始セシムルニツイテハ、市場ノ開設者ト市場營業者トノ關係ニ於テ、諸般ノ事項ニ關シ協議協定ヲ遂ゲタルモノナリ。而シテ板船權ノ措置ニツイテモ、亦當事者ノ間ニ種々ノ交渉アリタルコトハ當然ノコトニ屬ス。之ニ關シ魚市場組合ニ於テハ之レガ補償ニツイテ市理事者ノ誓約ヲ得タリト稱ス。依テ按ズルニ、元來板船權ハ日本橋魚市場ニ於ケル特殊ノ權利ナル關係上、日本橋魚市場ノ移轉問題トハ離ル可ラザル關係ヲ有シ、魚市場ニ於ケル移轉、非移轉ノ論爭ノ一大原因ヲ成セルモノナリ。此ノ特權ヲ有セル者ハ此ノ特權ノ失ハルベキヲ思ヒテ移轉ヲ喜バズ、從テ若シ移轉スル場合ニハ、其ノ權利ニ對シ買收又ハ補償スベキ條件ヲ要求セシハ、明治四十四年ノ組合決議ニヨル本市ニ對スル建議ニヨリテモ明カナル所ナリ。(附錄七號參照)

而シテ大正十二年震災後ノ絕好機會ヲ利シテ魚市場移轉ノ斷行セラレントスルニ當リテモ、組合內ニハ移轉、非移轉ノ激烈ナル論爭ヲ生ジ、事態甚穩カナラザルモノアリタルモ、舊日本橋魚市場ノ復活ハ行政當局ノ絕對ニ許ス所トナラズ。又業者ノ一時移轉セル芝浦ノ假市場ハ、又固ヨリ一時ノ立退場所ニシテ、到底營業ヲ永續スベキ場所ニ非ラズ。玆ヲ以テ結局組合當事者モ、市ノ責任アル當局者ニ於テ『舊日本橋魚市場ノ損害ニ對シテハ相當ノ補償ヲナス』ノ誓約ヲナシタリト稱シ、之ヲ理由トシテ大正十二年十二月一日本市ノ築地魚市場ニ移轉シ業務ヲ開始セリ。此間ノ事情ヨリ推定スルニ、業者ノ所謂市當局者ノ誓約ナルモノガ果シテ事實ナリヤ否ヤハ明確ナル証據ノ徵スベキモノナシト雖、單ニ証據ナキノ故ヲ以テ之ヲ否定スルハ穩當ニ非ラズ。寧ロ諸般ノ事情ヲ綜合シ、當時ノ當事者ノ間ニハ之ニ關スル或程

度ノ交渉了解アリ、之ニヨリテ業者全部ノ移轉收容ガ圓滿ニ行ハレタルモノト推定スルヲ當レリトスベシ。

四　結　論

之ヲ要スルニ、板船權ノ補償ハ固ヨリ權利ノ存在及其喪失ノ事實ノ不明瞭ナルモノニ對シ、單ナル情實ニ因リ空漠ナル交付金ヲ與ヘントスルモノニ非ラズ。同時ニ又一定ノ法律命令ノ規定ニ依リ東京市ノ當然ノ義務トシテ之ヲ爲スモノニモ非ラズ。若シ中央卸賣市場法ニヨリ、或ハ移轉命令ノ行政處分ニ依リ、法令規定ニ基ク當然ノ義務ニ屬スルモノナリセバ、始メヨリ何等問題トナルベキモノニ非ラズ。業者亦法律ニ訴ヘテ之ガ補償ヲ受クルコトヲ得ベシ。此ノ点ニツイテハ特ニ論辯ヲ要スルモノナシ。然レドモ此ノ問題ハ單ニ法令ノ規定ニ基ク根據ナキノ故ヲ以テ否定セラルベキモノニ非ラズ。問題ハ東京市ガ其ノ開設セル市場ニ業者ヲ收容スルニツイテ、之ニ因リテ特殊ノ利益ヲ喪失スベキ權利ノ所有者ニ對スル措置ニツキ、業者ニ對シ何等ノ條件ヲモ約束セザリシヤ否ヤニ在リ。凡ソ公共團體ガ公企業ノ主體トシテ民營ノ企業又ハ營業ヲ收用併合スル等ノ場合ニ於テ、其買收又ハ補償ノ價格條件ニツイテハ、法令ノ規定アルトキハ勿論之ニ準據スベク、其法令ノ規定ナキ場合ニ於テハ、法令ノ禁ゼザル範圍、公序良俗ニ反セザル限リ、條理ト實情ニ從テ當事者ノ間ニ適當ニ協定合意ヲ遂グベキハ當然ノ事ナリ。

從テ若シ其ノ協定合意ガ適當ノ手續ヲ履ミ明確ナル內容ヲ定メタルモノナリセバ、又固ヨリ何等問題トナルベキモノニ非ラズ、唯此ノ板船權ノ場合ニ於テハ、震災後ノ緊急措置トシテ、ソレ等ノ点ガ不備不明確ナリシ爲メ、其ノ履行實現ニ關シ後日ニ於テ問題ヲ生ジタルモノナリ。斯ノ如キ場合ニ於テハ事ノ性質內容ノ如何ニヨリ、或ハ根本ニ異議ヲ生ズルコトアリ、或ハ其ノ程度方法等ニツキ異議ヲ生ズルコトアルモ、亦止ムヲ得ザル所ナルモ、結局ハ公正ナル條理ト實情トニ依リテ、適當ニ之ヲ解決セザル可ラズ。此ノ場合單ニ法律上ノ義務ナシ、又ハ約束ノ事實ヲ証明スベキモノナシ、又ハ手續上ニ欠陷アリ等ノ理由ヲ以テ、相手方ノ要求ヲ斥クルコトハ、法律上ノ爭トシテハ別問題ナレドモ、公共團體ノ行政行爲上ノ問題トシテハ穩當ト云フヲ得ズ。

板船權補償ノ問題ハ此見地ヨリ考究スルヲ要ス。此ノ見地ノ下ニ前述セル各般ノ事情ヲ綜合スルニ、築地魚市場ヘ移轉收容ノ事後ニ於テ、業者ガ板船權ノ補償ヲ本市ニ對シ要望シ、本市ガ愼重審査ノ結果之ニ對シ相當程度ノ補償交付金ヲ支給スルノ決定ヲ爲スニ至リシハ、問題ノ沿革上止ムヲ得ザルコトニシテ、偶々之ニ關連シテ不測ノ不祥事ヲ惹起セシハ眞ニ痛恨スベキコトナリト雖、案自体ハ行政上寧ロ當然ノ措置ナリト謂フヲ得ベシ。而シテ本市ガ日本橋魚市場ノ業者ヲ築地魚市場ニ收容セシ目的ハ、結局將來開設サルベキ本市中央卸賣市場ニ其儘之ヲ收容セントスルニ在リタルヲ以テ、今日愈々之ヲ中央卸賣市場ニ收容セントスルニ當リテ之ヲ解決シ、收容問題ニ關スル重要條件ヲ執行スルハ又蓋シ止ムヲ得ザルノ措置ナリト謂フヲ得ベシ。